

再三の偶然か必然か？

昭 25 専電・塚越としを

1. プロローグ

さて、先に「ただの偶然ではない」という文章を公開致しましたが、続いて不可思議な経験を致しましたので、ここに記します。恒例の「辻が花句会」九月句会（令和元年9月21日、神田・学士会館）で、当月の兼題「秋」に因みまして、「遊びをせんとや生まれけむ・秋」という句を投句致しましたところ、会員の方から「気になる俳句」ということで、特選に採って貰いました。これは、「梁塵秘抄・359歌」そのままに「秋」という風情ある季感を添えたものでした。

（「梁塵秘抄」とは、平安時代後期の歌謡集で後白河法皇選によるもの、当時の風俗などを知るのに貴重である。この359歌全句を示すと、「遊びをせんとや生まれけむ 戯れせんとや生まれけん 遊ぶ子どもの声きけば わが身さえこそゆるがるれ」と唄われている）

芭蕉の句に「おもしろうてやがて悲しき鶺鴒舟かな」がある。これに私の句の感興も近い。

2. 樹木希林展

翌月、10月4日に池袋・西武デパートのイベント「樹木希林を偲ぶ展覧会」（西武ギャラリー・10月2日～15日）観賞に出かけたところ、どうでしょう、その展覧会のキャッチフレーズに「遊びをせんとや生まれけむ展」と銘打っているではありませんか！内容はそれなりに希林さんの来し方をユニークに追って展示してあり、まずまず見応えのあるものでしたが、この符合には驚きでした。

（会場で拾った「希林語録」：人間という存在そのものが、「やがて哀しきもの」だと思っています、どういう死に方をしても人は誰でも「やがて哀しき」にゆくのではないのでしょうか。日本人には「ものの哀れ」という感覚がありますが、人はどんな人生を送ろうとも最後には「やがて哀しき」に終着するのです。俯瞰で見ることを覚え、どんな人生でもこれが出来れば生き残れます。美しい人はより美しく、そうでない人はそれなりに）

3. 映画「蜜蜂と遠雷」

その日の午後、サンシャイン60近くの映画館で2017年直木賞受

賞の恩田陸作「蜜蜂と遠雷」の映画（本日封切り）を観賞しました。

これは、日本開催の国際ピアノコンクールを舞台に若い人たちの「才能と運命」「音楽の詩的世界」を描き切った群像シーンが素晴らしく、胸を打つものでありました。その劇的な臨場感と高揚感を覚えながら帰途につきました。（この体験は、次の話に繋がります）

4. 山種美術館から恵比寿ガーデンシネマへ

同月6日、渋谷区・広尾の山種美術館「大観・春草・玉堂・龍子、日本画のパイオニア展」観賞に足を運んだが、展示内容は私としては「二番煎じ」であり、物足りないものであった。尚、午後開催のトークイベント「日本画は二度生まれる」講演会もお目当てであったが、聴講者満席ということでかなわなかった。

それで、予定外ではあるが、JR・恵比寿駅の反対側にある恵比寿ガーデンプレイス（東京都写真美術館・映画館など）を覗いてみることにした。まず、映画館を訪れると、フランス映画「パリに見出されたピアニスト」が上演中で、丁度、今、始まるばかりのタイミングであり、これはとばかり、飛び込んだ。

この映画は、パリの北駅でピアノを弾いている貧しい青年に足をとめた名門音楽学院ディレクターが、彼を国際ピアノコンクールの学院代表にまで育て上げてゆくまで、手に汗を握る葛藤を描いたもので、最後は見事に栄冠を勝ち得るのでした。

5. エピローグ

どうでしょうか？この二つの映画は全く重なりました。二日間に亘って、クラシックの名曲をタププリ聴かせてもらいました。

私の俳句と樹木希林展、そしてこのクラシック音楽の旋律が奏でる抒情的・情熱的な共有世界は何なのでしょう？

地域は「神田」「池袋」そして「恵比寿」です。私が選んだわけではありません。すべて、与えられたものなのです。

先の文章（ただの偶然ではあらない）の末尾に記しましたように、何らかの大きな手を背景に感じます。

長生きしていますと、色々な人生が見えてくるものですね。

（完）